

黒い蝶のおはなし

一遺骨収容の現場でなぜ

不思議なことが起こるのかー

佐波 優子

(ジャーナリスト)



佐波優子さんは秩父132号（平成28年7月号）で紹介いたしました様に、日本文化チャンネル「桜プロジェクト」(<http://www.ch-sakura.jp/>)のキャスターとして活躍されている他、陸上自衛隊予備自衛官・陸士長であるとともに、現在慶応義塾大学の環境情報学部にて在学中であります。

今回の話題は、佐波さんが9年前にモンゴルの遺骨収集団の一員として参加した時の体験談を「黒い蝶のおはなし」と題して、ネット上に発表したものである。

1939年に、モンゴルのノモンハンという場所で日本軍とソ連軍の戦闘がありました。国境線付近のハルハ河という川を巡っての戦いでした。日本では「ノモンハン事件」と事件扱いですが、ソ連側は今でも「ハルハ河戦争」と呼んでいます。それだけ沢山の戦死者が出た戦いで、いまだ沢山のご遺骨がノモンハンの土の中に眠っています。

私も9年前に、このノモンハン事件の戦没者遺骨収集に参加しました。派遣団の中

に、ノモンハン事件で戦ったという日本軍兵士の方も一緒でした。北海道の方で、当時87歳でした。今もお元気です。

それで毎日ノモンハンの土を掘ってご遺骨を探していました。ある日、黒い蝶が現れて、元兵士の方の周りをずっと舞っていました。周りには私達派遣団の人間が大勢いるのに、その方の周りばかり舞っていました。

それを見ていたご遺族の方が「きっと(ここノモンハンで戦死した)戦友が蝶になって会いに来たんだよ」といいました。その時、元兵士の方が嬉しそうに切なそうな顔で蝶の動きを追っていました。元兵士の方にとっては蝶は戦友に見え、遺族の方にとっては蝶は戦死したお父さんに見えたのだと思います。ご遺族の方も嬉しそうに切なそうに蝶を見つめていました。その時の場面が忘れられず、色紙に描きました。

このように、遺骨収容に参加するとご遺族の方々が「不思議だ」ということが沢山ありました。蝶や虫が戦友や遺族の周りを飛んだり、慰霊祭が終わった途端に晴天から雨になったり、ご遺族の方が父への手紙を読んだ直後に風が吹いて葉が舞ったり、様々なことが毎回起こります。そのたびにご遺族や戦友会の方々は「お父さんが会いにきてくれた」「不思議なことが起きた」と驚いていました。

なぜ毎回「不思議なこと」が起こるのでしょうか？私自身は「亡くなった人が動物や虫に乗り移って近しい人に会いにくる」ということは、科学的にないと思っています。亡くなった人の意思が風や雨などの気候をコントロールできるとも思っていません。なのになぜ、遺骨収容の現場ではそんなことが起こるのでしょうか？

私はこう思います。ご遺族の方々にとっては、どんな雨も風も虫も、舞いおりてきた枯葉1枚でさえも、「お父さんが姿を変

えて会いに来てくれた」と思えるのだと思います。家族が外国で戦死した遺族にとって、フィリピンの山奥もニューギニアのジャングルの中もノモンハンも、なかなか行ける場所ではありません。一生に一度の遺骨収容団の一員として家族が亡くなった戦地に来るご遺族もいます。お父さんが亡くなった場所に来るのは一度きりだというとき、人は「この地で父は亡くなったのだから、子供である自分になんとかして会いに来てくれるのではないか」と思うのではないのでしょうか。そしてちょっとした風も雨も昆虫も、お父さんが会いに来てくれたように感じるのではないかと思うのです。

私は、それは強い家族愛、人間愛がある

からこそ感じることなのだと思います。どんな小さな風も雨も「お父さんだ」とご遺族の方々が思えるくらい、その兵士は家族に愛されていたのだと思います。戦死したあとも、何年も何十年もずっと愛されていたのだと思います。なぜ様々な遺骨収容の現場で不思議な自然現象が起こるのか。それは、それだけ戦死した兵士の方が家族や戦友に想われているからだだと思います。

「戦友が会いにきた」「父ちゃんが会いに来たみたいや」という元兵士やご遺族の方の言葉を聞いたたびに、私はそういう人間の心が美しいといつも思います。

(2016年6月6日記) (川島順提供)